

## 水稲晩期栽培における昆虫の発生相

一丸政雄\*・末永一\*

ICHIMARU, M. &amp; SUENAGA, H. On the Insect Pattern occurred in the Paddy Rice Field Cultured in Late Period

従者等は水稲の早晩期栽培における害虫勢力の動向を慣行栽培のそれと比較検討して、早晩期栽培における害虫防除の狙いを明確にしようとしている。茲には慣行のものと対比した晩期栽培の害虫発生相の概要を述べる。

晩期栽培農林37号7月10日播種、8月3日挿秧、普通栽培農林18号5月25日播種、6月30日挿秧、当場の耕種概に準じ各々1区1畝2区制とし、薬剤を用いない無防除状態で通し、成虫を対照とした掬取り並びに噴入虫を対照とした採取分解調査を併用、坪当り虫数として整理した。小面積によつた特異性はあるが両者の傾向を比較することは出来よう。

**結果の要旨** 1. 苗代期の特異性 普通(慣行)栽培の苗代ではツマグロヨコバイ・ヒメトビウソカ・フタテンヨコバイが非常に多く、他の昆虫ではユスリカ類・ヌカカ類・キモグリバエ・クロツヤミギワバエ等の双翅類が圧倒的であるが、晩期苗代ではそれ等の害虫・その他の種類も著しく少く、僅かにユスリカ類の発生が目されるに過ぎない。

2. 本田前期の特異性 普通栽培では二化螟虫幼虫が最も重要、且つ多い害虫で、これに次いでセジロウソカ・ツマグロヨコバイ、他の昆虫ではユスリカ類・ヌカカ類・キモグリバエ・クロツヤミギワバエ等が多い。これに対して晩期水稲では非常に多いイネクロカラバエ、次いでセジロウソカ・イネアラムシ・ツマグロヨコバイ・ヌカカ類・ユスリカ類が多く、二化螟虫

がかげをひそめ、これに代つてクロカラバエとセジロウソカが頭角を現わす。

3. 本田後期の特異性 出穂期以後普通栽培では二化螟虫2化期の発生で、この幼虫を主害虫に末期になるに従つてトビイロウソカの増加があり、他の昆虫ではユスリカ・ヌカカ類が多い。晩期栽培では二化螟虫は特に多くなく、代つてセジロウソカの増加が目立つ。ユスリカ・ヌカカ類は普通栽培のそれよりも多い、またキモグリバエ・クロツヤミギワバエ・アブラムシ類は末期に到るに従つて著しく増加し、普通栽培のそれとは大いに趣を異にする。ツマグロヨコバイは両者とも最も多い種類ではほぼ同等の推移を示し、トビイロウソカもまた両者ほぼ同様な動きであつた。

4. 群集構成と防除対照害虫の動き 普通・晩期両様の栽培稲圃における昆虫群集の構成を等比級数法則相関系列によつて見たのでは、各時期並びにその推移についてもほぼ同様で、優占種はヌカカ・ユスリカの双翅類及びツマグロヨコバイとなるが、群内における重要害虫の位置は両栽培で可成り異なつている。その詳細はここには省くが要旨は上記の特異性と一致する。

**概括** 晩期栽培では苗代期の害虫は量的に少く殆んど防除の対照とするにたらない。本田初期にイネクロカラバエ・イネアラムシの発生加害が多く、また本田初期から10月中旬までセジロウソカの発生加害が目立つ、これ等は薬剤防除の対照として重視される。これに反して二化螟虫の発生は非常に少く殆んど防除の対照とならない状況である。

\*九州農業試験場